

Xiāng yuàn dé zhī zéi yě
郷原徳之賊也きょうげん とく ぞく
郷原は徳の賊なり〈陽貨第十七〉うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

『論語』には後世、格言となった言葉が数多くあります。「四十にして惑わず」「一を聞いて十を知る」「信しんなくんば立たず」等のように、既に人口に膾炙はいしして、一度聞いただけで、だいたいの意味が分かるものもありますが、中には分かりにくいものもあります。表題の「郷原徳之賊也 (Xiāng yuàn dé zhī zéi yě) (郷原は徳とくの賊ぞくなり) もその一例と言ってよいでしょう。「郷原 xiāngyuàn」は「郷愿(郷愿)」とも書きます。郷きょうとは中国では地方の行政単位のことをいいます。示す領域の規模は時代によって異なりますが、この呼称は現在でも通用しています。日本でもかつて「郷」という呼称が使われたこともありますが、今風に言えば市町村に当たるのでしょうか。また郷里、故郷、望郷などのように、居住地や出身地を表わすこともあります。『論語』では居住地を示す「郷党」の二文字でしてしばしば出てきます。住み慣れた集団領域、くつろぎの場所、あるいはもう少し砕けて、仲間内という意味を持たせることもできます。

「愿」の字は、現在では「願」の簡体字として使われますが、本来は別字でした。愿げんには謹厳実直という意味があります。決して悪い意味ではありません。それが「郷愿」となる何故「徳の賊」となるのでしょうか。「賊ぞく」とは破壊者という意味です。

孔子より200年ばかり後に活躍した孟子は、この言葉に関する弟子万章ばんしょうの質問に対して次のように解説しています。

先ず質問の全文から見てみましょう。「一郷皆称原人焉。无所往而不为原人。孔子以为徳之賊，何哉？ (Yì xiāng jiē chēng yuàn rén yān, wú suǒ wǎng ér bù wéi yuàn rén. Kǒng zǐ yǐ wéi dé zhī zéi, hé zāi ?) (一郷皆原人と称す。往く所として原人

と為さざる無し。孔子以て徳の賊と為す、何ぞや) <『孟子』尽心下>。ここでいう原人とは善人のことです。仲間内ではみんなが善人だと言って褒めそやします。褒めない人などいません。でも孔子はそういう人のことを「徳の破壊者」だと言っています。何故でしょうか。

これに対して孟子が答えます。

「同乎流俗，合乎汚世，居之似忠信，行之似廉洁。众皆悦之，自以为是 (Tóng hū liú sú, hé hū wū shì, jū zhī sì zhōng xìn, xíng zhī sì lián jié. zhòng jiē yuè zhī, zì yǐ wéi shì) (流俗に同じ、汚世に合し、之に居ること忠信に似て、之を行うこと廉潔に似たり。衆皆之を悦び、自ら以て是と為す)。低俗に流れ、汚濁の世にまみれているのに、日常生活では、如何にも信義に厚く、公務に就けば清廉潔白に見える。仲間内ではやたらと受けが良く、自らもそれを良しとしている。郷原とはそういうものである、と。

この意味からすれば、外面はもっともらしく見えるが、実際は汚れた世の中を、ずる賢く立ち回って、うまく生き延びる偽善者、似非君子ということになります。

孟子は、さらに「孔子曰：恶似而非者 (Kǒng zǐ yuē : wù sì ér fēi zě) (孔子曰く、似て非なる者を恶む) <同上>」ともいっています。しかし今の『論語』にこの言葉はありません。『孟子』に至って初めて出てきます。もしかして当時の『論語』テキストにはこういう言葉があったのかもしれない。

それはともかく、「郷原」=「似て非なる者」、今の世にも多すぎると思いませんか。

(わりりい「中国語で読む漢詩の会」講師)